

り選択的に阻害を受ける H⁺-ATPase を主体とする標品であり、グルコースを過剰に添加したバッチ培養下での活性増強は認められなかった。

○根本 優子, 根本 孝幸, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座

演題10. 1982年から1988年まで久慈地域で分離した A 群レンサ球菌の T 型別と薬剤感受性

○本田 寿子, 田近志保子, 佐々木 実
金子 克, 村田 政美*

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座
岩手県立久慈病院臨床検査科*

1982年から1988年までの7年間に岩手県北久慈地域で分離したβ-溶血レンサ球菌1,455株について、レンサ球菌用血清(デンカ生研)で群別と型別を行った。また、A群レンサ球菌のpenicillin, ampicillin, cephaloridine, cephalixin, oleandomycin, lincomycin, tetracycline, chloramphenicol, erythromycinの9薬剤に対する感受性試験を日本化学療法学会標準法で行った。

分離したβ-溶血レンサ球菌1,455株のうち、A群レンサ球菌は1,112株、B群レンサ球菌は336株、C群レンサ球菌1株、G群レンサ球菌6株であった。A群レンサ球菌1,112株のT型別をみるとT12型が323株で最も多く、T4型216株、T6型、T13型と続いた。これを年次別にみるとT12型が首位であったのは1986年と1987年で、他の年にはT1型、T13型、T4型、T6型が首位であった。さらに、A群レンサ球菌のうち小児咽頭から分離した1,037株のT型の年次別推移と、盛岡で同期間に小児咽頭から分離したA群レンサ球菌1,546株の推移を比較すると、1986年に盛岡ではT3型の流行があったが、久慈地域では1985年にみられた。また、1988年に盛岡で18株(31.0%)と高率に分離されたT1型は久慈地域ではわずかに2株(1.7%)で地域差がみられた。

薬剤感受性についてはPCs, Cephemsに高い感受性を示し、EM, OL, LCMには高度耐性(≥200 μg/ml)菌もみられた。また、TCに対する耐性菌(≥25 μg/ml)が1984年、1985年に多かった。TC耐性はT4型に多いといわれているが、1984年はT4型が114株(50.2%)、1985年には57株(26.5%)と高率に分離されており、その関連がうかがわれた。

演題11. 熱ショック蛋白質 hsp90のグルコルチコイドレセプターに対する新しい役割

熱ショック蛋白質 hsp90は細胞質蛋白質の約1%に相当し、細胞の機能維持に重要な役割を果たしているものと考えられるが、詳細はわかっていない。現在のところ、細胞内繊維を構成するアクチン、チューブリンに結合し、また、発ガン遺伝子産物の一種であるpp60^{v-src} やステロイドレセプターに結合する事がわかっている。ステロイドレセプターではレセプターもノマーと結合し、DNA結合能を持たない非活性型複合体を形成する。この複合体はステロイドの結合によって解離するものと考えられているが、両蛋白質の*in vitro*での再構成は成功していない。今回、組換えDNAの手法を用いてhsp90とレセプターの相互作用について検討した。

大腸菌で発現したN未欠損ヒトグルコルチコイドレセプターは大腸菌hsp90と結合せず、ホルモン結合親和性は約70nMでラット肝レセプターより100倍程親和性が低かった。一方、同じ領域を無細胞翻訳系で合成した場合、レセプターはhsp90と結合しており、また、通常ホルモン結合親和性を持っていた。従って、hsp90の機能として、その結合によりグルコルチコイドレセプターがホルモン高親和性構造をとる事が考えられた。

そこで、実際に大腸菌で発現したグルコルチコイドレセプターが肝レセプターと異なる3次構造をとっているかどうかを[³H]デキサメサゾン-21-メシレート(DM)によるアフィニティーラベルとラジオシークエンスの手法を用いて検討した。その結果、レセプターのステロイド結合部位に存在する5つのシステイン残基全てがDMと結合し、一方、肝グルコルチコイドレセプターではCys-63gのみが標識される事から、hsp90と結合していない大腸菌発現レセプターは肝レセプターよりもゆるやかな3次構造をとっているものと推定された。この構造の違いによりホルモン結合親和性が低くなっているものと考えられる。

演題12. マウス顎下腺核におけるアンドロゲン受容体について

○佐藤 詔子, 客本 斉子, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座